山と花のたより 170号

２０１３年９月２０日　松尾忠
メールアドレス　tadashi6414@smile.ocn.ne.jp
http://yama-to-hana-no-tayori.sakuraweb.com

↑平治（ひじ）岳のミヤマキリシマ

久々のミヤマキリシマ

高校クラブ同期生たちと堪能

季節がずれてしまったが、今年5月末日、九州在住の友人から「九重のミヤマキリシマの満開期、6月1日に博多駅に集合」のメールが届いた。

集まったのは高校時代の地学部同期の７人（男４、女３）、今年度72歳の人々。お互いの息災を確かめ合いつつ、レンタカーで九重に向かった。

日本一の大つり橋

天気はぐずつきかげんだが、車は**「豊後中村駅」**（実に懐かしい）の案内板を見て、やがて**九酔渓**「十三曲がり」の急坂をうねうねと登っていく。高校時代バスの最前列に座って、車体を崖から突き出しながらヘアピンカーブを曲がっていくのに肝を冷やしたのを思い出す。

まもなく「日本一」を売り文句にしている**「夢の大吊橋」**に到着、料金を払って往復する。さすがに長い。だが頑丈すぎる支柱やワイヤー、路面はコンクリート板、安定していてゆれが少なく、十津川村谷瀬の吊橋ほどのスリルはない。それに観光用なので対岸からバイクが走ってくる心配もないのだ。吊橋の魅力と言う点では谷瀬の方が上かな、と思ったが、こちらも渓谷美を誇る**鳴子渓谷**をまたいでいるだけに新緑、紅葉の時期は素晴らしいに違いない。

山の斜面を覆うピンクの花

２日目、**星生（ほっしょう）温泉**ホテルから**長者原**（ちょうじゃばる）に出て、自然観察路を**坊ガツル**に向かう。この途中で薄くピンクを帯びた

ギンリョウソウを見た（前頁写真）。

坊ガツルから**大戸越**へは泥濘の道、靴もスパッツもドロドロにしながら、急坂を登る。しかし大戸越の峠に着いて、平治岳（1642m）を見た途端に疲れは吹っ飛ぶ。地表を這う霧の切れ間、見える斜面が一面ピンクなのだ。何回見ても感嘆する情景。はるばる来た甲斐があった。

独特の山容（メサ）の万年山

↑万年山山頂、遠くに由布岳

3 日目、帰途大分県玖珠郡玖珠町にある**万年山（はねやま）**に登った。この山は標高 1140m、浸食により固い部分が台形状に残った**卓状台地**（**メサ**＝スペイン語でテーブルの意）と呼ばれる特異な地形が 2 段になっている（玖珠 2 重メサ）。

そしてこの台地の上にミヤマキリシマが群落をなしているのだ。この日花は最盛期を過ぎていたが、晴天のもと四囲の山々がよく眺められ、九重連山も阿蘇もほぼ全貌を見せていた。皆でのんびりとした山歩きを楽しんだ。

ちなみに、この近くに伐株山（きりかぶやま・685m）がある。この山はメサの浸食（差別浸食）がさらに進んで切り株状になったもので、ビュートと呼ばれる地形である。

ふるさとの歴史を学ぶ　　連続歴史講座が近世史に

健生会友の会主催の歴史講座第 15 回目が 9 月 8 日健生荘多目的室で開かれた。この回から講義は「大和近世史」にはいり、来年 3 月まで 7 回にわたって、天理大学の谷山正道教授によって行われる。

この日谷山先生は、「近世社会の成立」と題して、中世の興福寺など寺社勢力による荘園支配から、武士による支配体制へと移っていった過程を具体例を挙げて、解明。

刀狩・兵農分離、検地と石高制、身分制度の確立などの役割、意義など分かりやすく語られた。　　以上 170 号